凝然の浄土教理解——『大乗起信論』三心の解釈を中心に——

大谷由香

はじめに

八宗兼学の学僧として名高い示観国師凝然（一二四〇—一三二一）は、鎌倉期に東大寺戒壇院を中心として活躍し、その生涯に百二十五部千二百余巻もの著作を遺したことが知られている。このうち、二十三部百五十九巻が浄土教についての著作であったとされており、[1] これらの著作をなすにあたっての薫陶を受けた師は、円照（一二二〇—一二七七）・長西（一一八四—一二六一）・真空（一二〇三—一二六八）であったと考えられている。[2] 彼は以下の略歴[3]にあるように、二十九歳で『八宗綱要』を著すまでに、弥陀信仰者である以上の三人から教えを得る機会を得ており、このことから比較的若い時分から浄土教に興味を持ち、これを学んだことがわかる。

しかし、二十三部といわれる彼の浄土教関連書物のうち、現存しているのは浄土教の歴史が記された『浄土法門源流章』一巻（以下

元号	西暦	年齢	事跡
正元元	一二五九	二十	円照を戒師として、東大寺戒壇院において通受戒を受ける。
			円照を師として、主に律学を学ぶ。
			唐招提寺の証玄（一二二〇—一二九二）より律学を学ぶ。
			東大寺真言院の聖守（一二一九—一二九一）より天台教学・密教学を学ぶ。
			東大寺尊勝院の宗性（一二〇二—一二七八）より華厳教学を学ぶ。
弘長元	一二六一	二十二	**九品寺長西より浄土教学を学び、特に善導の『観無量寿経疏』を学ぶ。**
			聖徳太子の法華・維摩・勝鬘の三経義疏を修学。
弘長三	一二六三	二十四	**木幡観音院の真空から空海の『十住心論』により真言教学を学ぶ。**
文永五	一二六八	二十九	『八宗綱要』二巻を、伊予の円明寺西谷において撰述。

『源流章』と略す）のみであって、多くの著作を記したことが分かっていながら、彼がどのように浄土教を解釈していたのかについては詳しく知ることができないのが現状である。そのため、凝然の浄土教への対応に関する研究の多くは、同じく彼の著作である『八宗綱要』『内典十宗秀句』『内典塵露章』『三国仏法伝通縁起』などの仏教綱要書と、『源流章』を合わせ見て、凝然が「宗」として浄土教をどのようにとらえていたかということに焦点を当てたものであり、④凝然自身がどのように浄土教を解釈していたかに触れる研究は少ない。わずかに①凝然自身が著作の奥書等で使用する「自称」に「欣浄」と付されることが屢々見受けられること、⑤②六十四歳の時の著作である『円照上人行状』の奥書に、「于時成安四年壬寅（一三〇二）三月六日、於二東大寺戒壇院一記レ之。遺弟沙門凝然。春秋六十有三也。予年三十八値二先師之寂一、経二二十六年一。今至二此齢一、生涯不レ幾。奄化在レ近、願二生安養一。早見二先師一耳。」（『続々群書類従』巻三、五〇五頁下）とあり、阿弥陀浄土に生まれて円照に会うことを願う旨が識されていること、③華厳部・律部に次いで、浄土部の書物を多く著していること、④七十七歳の時、『戒壇院定置』において、「三大律部、菩薩戒諸章、華厳円宗、所有大小諸部派章疏、浄土諸文、太子三経疏、及声明等諸雑芸」と述べ、戒壇院で学ぶべき学問に浄土教を加えていることなどから、凝然が師らの信仰を受け継いで、自ら諸行本願義によった弥陀信仰を有していたであろうと推測されているのみである。⑥

本稿では、まず『源流章』から窺える凝然の歴史観から、凝然の浄土教に対する基本的立場を明らかにし、浄土教の源として凝然が『大乗起信論』（以下『起信論』と略す）を挙げることに注目して、彼の浄土教理解の一端を明らかにしたいと思う。

一　浄土教に対する凝然の基本的立場

凝然の浄土教関連の著作のうち、唯一現在に伝わっている『源流章』は、印度・中国・日本の三国における浄土教の相承を述べる歴史書であるが、その著述分量の半分は、法然門下の主張がどのようなものであったかを紹介することに割かれており、自ずから本書内容の中心が法然門下の主張を紹介することにあったことが知られる。しかし肝心の法然について凝然は

> 近代有二叡山黒谷源空大徳一。後機敏利、智慮深濬。人王第七十六代、近衛天皇御宇、久安六年歳次己巳、齢方十八厭レ世閑居。専欣二安養一、修二往生業一。浄土教義従レ此漸昌。自行化他唯在レ此。人王八十二代、後鳥羽天皇御宇、建久九年歳次戊午、于時源空年六十六、録二『選択本願念仏集』一巻一開為二二巻一。立二浄土宗一、大顕二義理一。自レ此已後浄教甚昌。貴賤倶修、都鄙咸遵。人王等八十四代、順徳天皇御宇、建暦二年歳次壬申、源空入滅。年満二八十一。（『源流章』、『大正大蔵経』巻八四、一九六頁上）

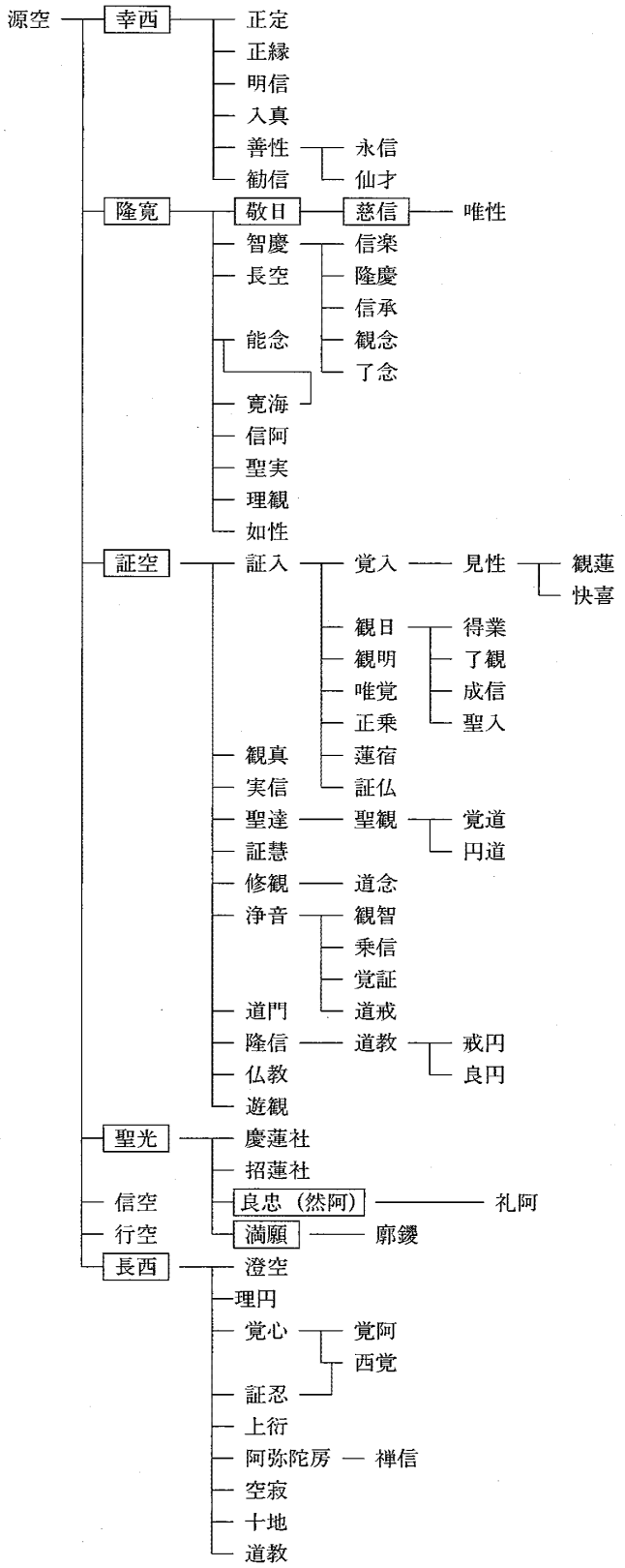
と述べるのみで、その功績は讃えるものの、教学的立場についてはまく説明しておらず⑦、専ら法然の弟子や孫弟子についてのみ教学的立場の説明がなされている。

凝然が『源流章』において法然の弟子として紹介するのは以下の系図の通りであるが、このうち四角で囲った人物についてのみ、その教学的立場が説明されている。

この系図からわかるように、法然の直弟子としてここに挙げられる七人のうち、教学的立場が説明されているのは、幸西（一一六三―一二四七）・隆寛（一一四八―一二二七）・証空（一一七七―一二四七）・聖光（弁長、一一六二―一二三八）・長西の五人である。このうち念仏のみを弥陀の本願として、余行は本願ではないと主張していると紹介されているのが、隆寛と聖光である。

［A　隆寛］

念仏正是弥陀本願、自余諸行皆非二本願一。余行非二是仏本願行一而業成就即得二往生一、雖レ得レ生レ彼而生二辺地一。九品生者皆辺地故。是故余行不レ生二報土一。非二本願一故。麁劣業故。称名念仏即生二報土一。（『源流章』、『大正大蔵経』巻八四、一九八頁上）



［B 聖光］

光公所立、唯念仏行是仏本願、自余諸行非二弥陀願一。（『源流章』、『大正大蔵経』巻八四、二〇〇頁中）

さて凝然が、法然の孫弟子としてその立義を説明するのは、先の系図にあるように、この念仏本願の立場を採る隆寛・聖光の弟子に限っている。隆寛については弟子の敬日（生没年不詳）・孫弟子の慈信（？―一二八九―？）の説、聖光については弟子の良忠（然阿、一一九九―一二八七）・満願（生没年不詳）の説がここで紹介されている。

［C 隆寛の弟子・敬日］

隆寛門人有二敬日大徳・智慶大徳等一。各弘二所承一教化道俗。敬日公云。「修二余諸行一亦生二報土一而非二是仏本願之行一。九品之中上品上生是報浄土、自下八品並是辺地。」此等義、略違二本所承一。（『源流章』、『大正大蔵経』巻八四、一九八頁中）

［D 隆寛の孫弟子・慈信］

日公弟子有二洛東慈信大徳一。天台教観研精幽致、随二従日公一学二浄土教一而立レ義云。「余行亦是弥陀本願。非二唯念仏以二本願一故得レ生二報土一。」此亦違二師所立義一也。（『源流章』、『大正大蔵経』巻八四、一九八頁中）

［E 聖光の弟子・良忠（然阿）・満願］

光公門人亦有二満願上人一。初承二長西一、兼随二光公一。光公所立、唯念仏行是仏本願、自余諸行非二弥陀願一。然阿等義、諸行非二本願一、雖レ非二本願一而得二往生一。願公所立、諸行非二是弥陀別願一、雖レ非二別願一而得二往生一。約二就四弘総願門一故一切万行随レ意得レ度。在二総願門一故得二往生一。観仏・念仏両三昧字雖レ有二両名一、唯是一体。両名互通二定散門一故。（『源流章』、『大正大蔵経』巻八四、二〇〇頁中）

これらの資料からわかるように、隆寛は念仏のみが弥陀の本願であり、念仏行者のみが弥陀報土に往生して、余行の行者は疑惑往生者の果報である辺地に生ずると主張しているにも関わらず［A］、弟子である敬日はこれに従わずに、余行は弥陀の本願ではないけれども、余行の行者もまた報土に往生できると主張し［C］、その弟子である慈信はこれをおしすすめて、余行もまた本願であるから余行の行者は報土に往生できると主張している［D］。つまり念仏のみが弥陀の本願であると考える隆寛の説は、その弟子によって否定されていったとみるのが凝然の浄土教の見方といえるであろう。

同じ事が、聖光についても言える。聖光もまた弥陀の本願を念仏に限って理解しており、余行は全く弥陀の願にないと主張していたが［B］、聖光の弟子である良忠（然阿）は、余行は弥陀の本願ではないけれども余行の行者は報土に往生することができると主張し、

満願は余行の行者を往生させるということは四弘誓願において誓われているから、余行の行者も往生浄土が可能であると主張している[E]。

つまり念仏本願の立場を採る者の説は全く継承されておらず、自らの弟子達によって訂正されてきたとみるのが凝然の歴史認識である。すなわちこれらのことからは、凝然が念仏本願の立場に対して否定的であることが明確であり、返って彼が諸行往生・諸行本願の立場を採っていたであろうことが推測できる。

二　凝然の浄土教理解と『起信論』

さて先の『源流章』において、凝然は浄土教の相承について、「古来弘二浄土一者、[中略]総通二三国一言二所憑一者、有二十八祖一。」（『大正大蔵経』巻八四、一九六頁上―中）と述べて以下のようにインド・中国・日本に通じて十八祖が挙げられることを明らかにしている。

十八祖
- 印度 ― 馬鳴―龍樹―世親
- 中国 ― 菩提流支―曇鸞―道綽―迦才―善導―懐感―法照―少康―元照
- 日本 ― 智光―昌海―源信―永観―実範―源空

これからわかるように、凝然は浄土教の始祖として馬鳴を挙げているが、『八宗綱要』には

又浄土宗教、[中略]源出二於『起信論』一、継在二龍樹論教一。天親菩薩、菩提流支、曇鸞、道綽、善導、懐感等、乃至二日域一、咸作二解釈一、競而弘通。（『八宗綱要』巻下、『大日本仏教全書』巻二、三九頁上―下）

とあり、これが『起信論』の著者である馬鳴を指すことがわかる。[8]

つまり凝然は『八宗綱要』を著した若干二十九歳の頃より、『源流章』を著した七十二歳の時分に至るまで、浄土教の源は『起信論』であり、三論や律、または法相・天台等を宗とする人物によって浄土教が相承されてきたと考えていたことがわかる。[9]しかし自らを華厳宗であると主張する凝然が、これら浄土教の相承に華厳を宗とする人物を挙げていないことは注目すべき点であろう。

（一）凝然の三心説

『起信論』を重視して浄土教を解釈する態度は、三心の解釈にも色濃くみることができる。彼の三心説は最晩年の八十一歳の時の著作である、聖徳太子の『維摩経義疏』を注釈した『維摩経疏菴羅記』（以下『菴羅記』と略す）に述べられる。三心とは、『観無量寿経』（以下、『観経』と略す）に説かれる、浄土に往生することができる者が具えるべき三種の心を指すが、凝然はこれを往生極楽する

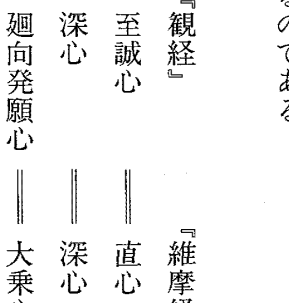
ための最低条件として挙げている。

或観二極楽依正一報一、或念二弥陀聖衆名号一、或修二止観定慧之法一、或修二五停四念等法一、或持二軽重因果諸戒一、或修二持呪・誦経等行一、書写講説、礼拝懺悔、起二立塔像一、飯食設供、懸繒燃灯、理観事修、智行福業、千門万行、億度諸善。修二如レ是衆行一、往二生安養国一、由二三心一故。（『菴羅記』巻九、『大日本仏教全書』巻五、二二六頁上）

つまりさまざまな修法を行ったとしても、この三心を具えていないことには、弥陀浄土へ往生することは叶わないのである。凝然はこの三心を詳しく解説して以下のように述べている。

今此経（＝『維摩経』）中直心・深心・大乗心者、即与二『起信』直心・深心・大悲心一如レ次全同。初二行者、彼此名同。第三大乗心、即『論』大悲心。何故特名二大乗心一。前二亦是大乗心故。然前二心名義、亦容二通声聞縁覚乗一。此大乗心是利他行不レ通二二乗一。菩薩独作故、云二大乗心一。菩薩利他由二大悲一故。是故『論』中、名二大悲心一。『観無量寿経』説。「往二生極楽一、有二三種心一。一至誠心、二深心、三廻向発願心。」如レ次同二今『経』直心・深心・大乗心一。（『菴羅記』巻九、『大日本仏教全書』巻五、二二五頁下）

すなわち凝然は、『観経』に説かれる至誠心・深心・廻向発願心の三心が、『維摩経』に説かれる直心・深心・大乗心の三心、また『起信論』に説かれる直心・深心・大悲心の三心と全く同じであると主張しているのである。



凝然は、この二経一論に説かれる三心を同じものであると解釈する説は、「唐朝解釈観経之師」と「北洛九品寺長西」との説に依ったものであり、自らの独創ではないことを以下のようにことわっている。[10]

唐朝解二釈『観経』一之師、釈二至誠等三心行相一、即引二『起信』直心等三心一、令二全一同一、以為二往生極楽安心一。今経（＝『維摩経』）直心等三、全同二『起信』三心一。今経（＝『維摩経』）所説一十七事皆是行業、非二是安心一。然後十四即是行業、初三種法通二心及行一。昔北洛九品寺長西上人。浄土法門之先徳也。予、齢居二二十二一、往二詣彼寺一聴二講善導和尚『観経義疏』一。于時長西大徳、年齢七十八。即弘長元年辛酉七月、自恣竟也。西公語レ

予云。「『観経』三心、『維摩経』十七事中初之三心、『起信論』中所レ説二心、二経一論所レ説全同。『維摩』『観経』並是浄土門中心行。『起信』三心穢土修行、聖道門中習業安心。所レ向雖レ異、法体是同」云々。（『菴羅記』巻九、『大日本仏教全書』巻五、二二六頁上）

これによると長西は、二経一論の三心は法体は同じであるけれども、このうち『維摩経』『観経』の三心は浄土門の行であり、『起信論』の三心は聖道門の行であると凝然に説いたという。

凝然自身もまた、二経一論の性格の違いを以下のように整理している。

［a　観経］

極楽浄土、清浄良伴、又由二弥陀仏因位本願一。彼願云。「設我得レ仏、国中人天、不下得二正定聚一、必至中滅土上者、不レ取二正覚一」此出二『無量寿経』上巻一。同経下巻説云。「其有二衆生一、生二彼国一者、皆悉住二於正定之聚一。所以者何。彼仏国中、無二諸邪聚及不定聚一」已上。（『菴羅記』巻九、『大日本仏教全書』巻五、二二二頁下）

［b　維摩経］

今疏（＝『維摩経義疏』）所立浄土門者、唯是自力所修浄土業因。由二此業因一、感二浄土生一故、随二自己階位分斉一、有二不退堕一、或有二退堕一。上浄下浄、階位分斉、皆自力門所感所成。不レ同二弥陀安養世界一。（『菴羅記』巻九、『大日本仏教全書』巻五、二二三頁上）

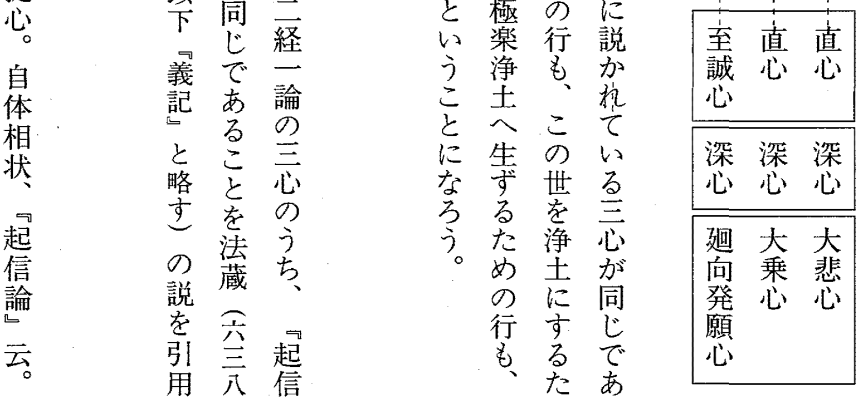
今経（＝『維摩経』）浄心所感浄土。非二是仏願義門一故爾。（『菴羅記』巻九、『大日本仏教全書』巻五、二二三頁下―二二四頁上）

［c　起信論］

『起信論』中、説下修二習四信五行一、信心成就、得中不退転上。根機勝者、於二此娑婆一、信心成就、即得二不退一。若怯劣者、於二穢土中一、修行信心、値レ縁退堕、信心難レ成。如レ是人、生二他方界浄仏土中一、値二殊勝縁一、勇猛進修、信心成就、得二不退転一。（『菴羅記』巻九、『大日本仏教全書』巻五、二二二頁下）

すなわち『観経』では、弥陀の本願力によって、一切衆生が正定聚位を得ることのできる極楽浄土が説かれているのに対し［a］、『維摩経』では自力所修の浄土が説かれている［b］。また『起信論』に説かれるのは基本的に穢土の修行信心についてであって、穢土において信心が定まらなかった場合に、弥陀浄土へ生ずることが勧められている［c］。このように二経一論は、そこに説かれる三心の

本性が同じであっても、各々に説かれる内容の性格には、はっきりとした相違があることを凝然自身が認めているのである。以上の凝然の考える二経一論の性格を図示すれば、以下のようになるであろう。[11]



このように性格の異なる二経一論に説かれている三心が同じであるということは、この世で悟るための行も、この世を浄土にするための行も、また弥陀仏の願によって極楽浄土へ生ずるための行も、根本的な心のありようは同じであるということになろう。

(二) 凝然の三心・三聚浄戒同意説

更に凝然は、同じであるとされる二経一論の三心のうち、『起信論』所説の三心が、三聚浄戒等とも同じであることを法蔵（六三八―七一四）の『大乗起信論義記』（以下『義記』と略す）の説を引用して述べている。

> 此初三心、即是菩薩所発大菩提心。自体相状、『起信論』云。「二者深心、楽レ集二一切諸善行一故」已上。香象釈云。「備二具万徳一、帰二向心源一、即自利行本」已上。同『論』亦云。「三大悲心、欲レ抜二一切衆生苦一故」已上。同『疏』云。「広抜二物苦一、令レ得二菩提一、即利他行本。妙行雖レ広、三行統収故、標云二略説三一也。以二此即是二聚戒一故、三徳・三身、皆由レ此成故、即是彼三廻向故。謂初向二実際一、次向二菩提一、後向二衆生一。皆応二相配釈一之」已上。（『菴羅記』巻九、『大日本仏教全書』巻五、二二五頁上―下）

すなわち法蔵は『起信論』に表される三心は、妙行を三つに収めたものであり、これは三聚浄戒・三徳・三身・三廻向にそれぞれに相配することができると説く。凝然はこの一文を引くことで、『起信論』の説く三心が三聚浄戒等と相応するということを明らかにしているといえるであろう。

このことは翻って三聚浄戒の立場から見たときも同様である。彼は、戒の肝心は菩提心であるとして、次のように述べている。

> 此戒肝心大菩提心。常恒堅固一念不レ忘。此若緩万徳不レ生。初念所レ発菩提心中無量功徳生長成立。言二壊三聚一者、発二三聚心一名二菩提心一。直心律儀・深心摂善・大悲摂生、是名二三種大菩提心一。厭二離有為心一、欣二求菩提心一、深二念衆生心一。此三総是菩提心故。故退二大菩提心一即壊二三聚浄戒一。（『梵網戒本疏日珠鈔』巻第四四、『大正大蔵経』巻六二、二二〇頁下～二二一頁上）

ここで凝然は、三聚浄戒のそれぞれに『起信論』所説の三心を配当してこれを三種大菩薩心と名づけ、「退二大菩提心一即壊二三聚浄戒一」と言ってこれを戒の本質ともいうべき立場に位置づけている。ここに三聚浄戒と『起信論』所説の三心を同一視する凝然の理解を見てとれる。更には彼は以下のようにも述べており、三聚浄戒を三心のみならず三大などにも配当して理解していることがわかる。

> 所二以如来説二三聚戒一者、総而言レ之。為レ令二衆生返流帰源一故。別而言レ之、略有二十意一。①一為レ欲下顕二示如来自証三身妙果一、令中諸衆生信・解行・証上故。②二欲レ令二衆生識二知自心本有三因仏性一故。③三為レ令二衆生成二三発心一故。直心・深心、及大悲心是其三心。如レ次三身極果因也。④四為レ令二衆生識二知真如体相用大勝功徳法一故。⑤五為レ令二衆生成二就断悪・修善・度生三種妙行一故。⑥六為レ令二衆生成二三廻向一故。謂廻二向実際一、廻二向菩提一、廻二向衆生一也。⑦七為レ令二衆生分二証三身一故。⑧八為レ令二衆生獲二極円満三身仏果一故。⑨九為レ令二衆生感二成法身・般若・解脱、断智恩徳一。⑩十為レ令二衆生断二除界内・界外惑業苦報三障一故。『梵網経』等、諸大乗教所説三聚教興如レ是。此是通受戒法教起。（『律宗綱要』、『大正新修大蔵経』巻七四、九頁中―下）

これは凝然六十七才頃の著作とされている『律宗綱要』中の、如来が三聚浄戒を説いた理由として十意が説かれる箇所である。凝然は、三聚浄戒は衆生を真如に帰源させるために説かれたものであるとして、細かく十意を説くのであるが、これらの一つ一つが、『起信論』また『義記』に影響されたものであることを本文から読み取ることができる。すなわち十意のうち①には『起信論』所説の信成就発心・解行発心・証発心の三種発心を得させるためであるといい、③には信成就心である直心・深心・大悲心の三心を成ぜさせるためであるといい、④には真如の三大の功徳を知らしめるためであるという。ここに凝然の三聚浄戒理解が『起信論』に強く影響されて成り立っていることをみることができる。また『義記』にみられるのと同じように、⑨では三徳を感成させるためであるといい、⑧では三身を得させるためであるといい、⑥では三廻向を成させるためであるという。特に三廻向についてはその内容も先に挙げた『義記』の内容と全く同じであるから、凝然が『起信論』に基づき、また『義記』に影響を受けて、三聚浄戒を理解しているとみて差し支えないであろう。

以上のようにみてきたとき、三聚浄戒とは『起信論』に説かれる穢土における修行としての三心であり、この三聚浄戒のうちに、三身や三徳などの仏の功徳が収められていると解釈できる。

凝然の浄土教理解の発揮点は、『起信論』所説の三心＝三聚浄戒を、『義記』を仲介させることで、『観経』に説かれる往生浄土のために具足すべき三心と相応させたことにある。穢土の行である三聚

浄戒（＝『起信論』所説の三心）は、自らが今生で仏になることを誓うがために受持するのであるが、『起信論』所説の三心と『観経』所説の三心が相応するとしたことによって、今生が終わるまでに仏となることができなかった時には、この三聚浄戒を弥陀浄土へ向かうための行（＝『観経』所説の三心）へ振り替えることができるのである。今生においては三聚浄戒を受持し、後生においてはこれを転換させて弥陀浄土へと往生する、というのが凝然の理想であったことがここから知られるであろう。

（三）凝然の浄土教理解の背景

このように三聚浄戒と『観経』所説の三心が相応するという凝然の解釈には、その前提として律宗の中で浄土教が学ばれてきたとする歴史認識があると考えられる。『源流章』と同じく凝然七十二歳の時に記された『三国仏法伝通縁起』（以下『伝通縁起』と略す）には、浄土教の相承について次のように説かれている。

> 上古廬山法師、中古曇鸞・道綽・善導・懐感等師、後代慈雲・霊芝。霊芝律師先学二律宗一、次挙二台宗一、宗有二所証一、次亦弘レ律。南山律師三大律部各施二記解一、後研二浄教二十余年。取二捨諸師一作二『二経疏』一陳二自正義一。依承者衆記述非レ一。天下浄教皆帰二彼義一。行業義解事在二一均一。泉涌俊芿不可棄法師遠越二波瀾一入レ宋学レ法、正伝二台教・律宗一、兼伝二霊芝浄教一。即是浄教相伝規模。厥後彼寺宗師智鏡大徳入宋伝レ律、亦習二浄教一、遂還二本寺一昌弘二所学一。浄教所伝泉涌為レ本。然日本所弘皆用二善導一。鏡公本学二善導一。彼此兼包取捨在レ意。後二大徳允公・阿公皆兼二京師・霊芝二途一。兼正両門亦在二意慮一。（『伝通縁起』、『大日本仏教全書』巻一〇一、一〇五頁上―下）

すなわち中国において廬山慧遠（三三四―四一六）、曇鸞（四七六―五四二?）、道綽（五六二―六四五）、善導（六一三―六八一）、懐感（生没年不詳）、遵式（慈雲　九六四―一〇三二）と受け継がれてきた浄土教は、南山律宗中興の祖として名高い元照（霊芝　一〇四八―一一一六）に全て集約されており、入宋しこれを学んだ俊芿（一一六六―一二二七）・智鏡（生没年不詳）によって、泉涌寺に伝わっているという。このことから凝然は、浄土教の正統は律と共にあると考えていたとみてよいであろう。本章冒頭において凝然が、浄土教の源を『起信論』とし、それが三論や法相等を宗とする人物によって相承されてきたと認識していたことを確認したが、その正統こそは、律を宗とする者によって相承されてきたと凝然は考えていたのではないだろうか。そうであるからこそ、凝然はどうしても『起信論』所説の三心＝三聚浄戒と、『観経』所説の三心とが相応するということを述べなければならなかったと考えられる。『源流章』や他の概説書において、彼が浄土教の相承に華厳を宗とする人物を挙げないこともまた、彼が律の教学の範疇において浄土教を理解しよ

うとした傍証となるのではないだろうか。

まとめ

以上に凝然の浄土教理解をみてきた。凝然ははじめに述べたように、二十九歳で『八宗綱要』を記すまでに浄土教の素養を身につけており、以降基本的な浄土教理解は、晩年にいたるまでかわらなかったと推測される。それは、凝然が八十一歳の時の著作である『菴羅記』において、二十二歳の時に学んだ長西の説を出して三心について述べることからも、また凝然二十九歳の時の著作である『八宗綱要』において『起信論』が浄土教の源であると規定され、それが七十二歳の時の著作である『源流章』においてもかわることがなかったことからも言及できる。

しかし凝然の浄土教関連の著作がほとんど遺されていない現状においては、凝然が彼独特の三心理解について思索を深めていったのは、『円照上人行状』において極楽への願生を吐露した六十三歳の頃からとするのが妥当であろう。彼は六十七歳の時『律宗綱要』において『起信論』にもとづいた三聚浄戒の理論を構築し、七十二歳の時に、専修念仏を採る念仏本願の立場は三国を通じて伝承されず(『源流章』)、寧ろ浄土教は律宗の中にその正統性が保持されていることを明らかにし(『伝通縁起』)、八十一歳の時『菴羅記』において長西の説と『義記』の説を合わせることで、重層的な三心の解釈を行い、見事に律と浄土とを並行させることに成功している。

凝然の三心理解は、『維摩経』『観経』『起信論』の二経一論所説の三心が相応し、更に『起信論』の三心が三聚浄戒と相応し、三徳と相応し、三身と相応し、三廻向等と相応するというものである。これを図示すると以下のようになるであろう。

『維摩経』	『観経』	『起信論』〔三聚浄戒〕	〔三徳〕	〔三廻向〕	〔三身〕
直心	至誠心	―直心	―摂律儀戒	―断	法身
深心	深心	―深心	―摂善法戒	―智	般若
大乗心	廻向発願心	―大悲心	―摂衆生戒	―恩	解脱
				―廻向実際	法身
				―廻向菩提	報身
				―廻向衆生	応身

凝然がこのような三心説を構築した背後には、浄土教の正統が律宗の中にこそ流れているとする彼自身の歴史認識があると考えられる。そうであるからこそ、今生で悟るために受ける三聚浄戒は、そのまま後生の往生浄土のために具えるべき三心に転換されるべきであるし、そのためには『起信論』所説の三心と『観経』所説の三心とが相応していなければならないのである。

以上のことからは、凝然が諸行往生・諸行本願の立場こそが浄土教の正統であると考えており、今生において三聚浄戒を受持し、これを転換させて後生に弥陀浄土へ往生することを理想としていたことが明らかであろう。凝然は『伝通縁起』の中で、浄土教をまとめ上げた人物として元照を称賛しているが、彼もまた「生弘二律範一死帰二安養一。平生所得唯二法門(『仏祖統紀』巻第二九、『大正大蔵経』

巻四九、二九七頁下）」と伝えられるように、律と浄土とを並修していたことが知られる。⑫凝然の理想はひとまずこの元照の生き様に影響されたものとみて良いのではないだろうか。

註

①新藤晋海編『凝然大徳事績梗概』（東大寺教学部、一九七一）

②円照が弥陀浄土願生者であったことは、凝然の著作である『円照上人行状』に「同二十一日（健治三年丁丑十月）、暫起病床、於影向堂前説法化導、厭背生死、欣楽安養、祈念誓願、向仏乞哀」（『続々類書群従』巻三、四九〇頁下）と円照の示寂の様子が述べられていることから明らかであり、また長西は法然の弟子で、言うまでもなく浄土法門の人物である。加えて真空も三論・密・戒・浄土の法を兼修した人物で、『浄土往生論註解鈔』六巻を執筆した上、『本朝高僧伝』に「面西安座、結弥陀定印、如睡去矣。文永五年七月八日也」（『大日本仏教全書』巻一〇三、七八五頁上―下）と紹介されるなど、浄土教学に通じた弥陀浄土願生者であったことがわかる。前田瑞聴氏が、真空に凝然が師事したことについて「廻心上人より浄土教的薫陶を受けざる筈はないと思われる」と述べられている（前田瑞聴「浄土法門源流章解題」、『国訳一切経』史伝部二四、三二〇頁）ように、これら三師から凝然は、律や真言以外にも浄土教の薫陶を受けたと考えられている。

③この略伝は、『凝然大徳事績梗概』（注①参照）に基づいて作成した。本書は、凝然の著作物に著される識語等を集成し、それを年代順に並べて構成したものである。

④北畠典生「凝然の生涯と教学姿勢について」（『宗教的真理と現代』、教育新潮社、一九九三）、市川浩史「「宗」のゆくえ―覚憲・明恵・凝然の歴史意識―」（高木豊・小松邦彰編『鎌倉仏教の様相』、吉川弘文館、一九九九）、藤丸要「凝然の仏教史観」（『仏教学研究』五五、一九九九）、藤丸要「凝然教学の根本的立場」（『仏教学研究』五六、二〇〇二）など。

⑤凝然が奥書で使用する「自称」については、藤丸要「凝然教学の根本的立場」（注④参照）に整理されている。参照されたい。

⑥これらの根拠のうち、平川氏は①④を挙げられており（平川彰『八宗綱要』巻上、大蔵出版、一九八一）、前田瑞聴氏は②を挙げられておられる（前田瑞聴「浄土法門源流章解題」、注②参照）。また③に関連する事柄として、凝然が『源流章』を著していることも、彼に弥陀浄土往生信仰があったと推測される要因となっているようである。

⑦このような法然の扱いに対して、藤丸要氏は、「法然が説く念仏が一行選択の本願念仏であり、余行が打ち捨てられたものである」から、「凝然としては素直に肯首できるものではな」かったからであり、またそれでも凝然が法然を挙げているのは「法然門下において、様々な人々が師説に基づきながらも、自由な発想と独自の立場から各々の教学を樹立して」おり、「凝然はそこに価値を認めた」からであろうと述べられている。（藤丸要「凝然教学の根本的立場」、注④参照）

⑧凝然はこの馬鳴を『仏所行讃』を著した馬鳴と同一人物と考えていたため、龍樹以前に馬鳴を置いていると思われる。実際は『起信論』の成立は龍樹よりも後であり、五世紀頃の成立である。

⑨凝然が五十四歳の時の著作である『内典十宗秀句』には浄土教の流伝については触れられておらず、また同時代の著作であると推測される『内典塵露章』、七十二歳の時の著作である『三国仏法伝通縁起』では、印度における浄土教の相承については述べられていない。

⑩武覚超氏は、凝然が依拠している「唐朝解釈観経之師」について詳細な研究をなされており、これによれば凝然の説く二経一論の三心同意説は、迦才（生没年不詳、六―七世紀頃）の『浄土論』に起源が見出され、龍興（六五五―七一二）の『観無量寿経記』や南都浄土系の智光（生没年不詳、八世紀頃）を経て、叡山の良源（九一二

―九八五）がこれを継承し、叡山浄土教の中に伝承されて、長西から凝然へと伝えられたのではないか、と述べられている。（武覚超「凝然の菩提心と『起信論』―良源からの影響―」『天台教学の研究―大乗起信論との交渉―』［法蔵館、一九八八］七九―一〇一頁）

⑪ちなみに『維摩経』『観経』『起信論』において三心が説かれる箇所を列挙すれば、以下のようになるであろう。

『維摩経』は不可思議なる解脱の心境を高調することを旨とした経典であり、この経典で三心は、浄土の不可思議を説く十七事を説明する中の最初の三事として説かれる。

宝積。当知直心是菩薩浄土。菩薩成仏時不諂衆生来生其国。深心是菩薩浄土。菩薩成仏時具足功徳衆生来生其国。菩提心是菩薩浄土。菩薩成仏時大乗衆生来生其国。（『大正大蔵経』巻十四、五三八頁上―中）

『観経』は往生浄土を明らかにすることを旨とした経典であり、三心は弥陀浄土へ往生する九品の人のうち、上品上生の人が発する三種心として説かれる。

仏告阿難。及韋提希。凡生西方有九品人。上品上生者。若有衆生願生彼国者。発三種心即便往生。何等為三。一者至誠心。二者深心。三者廻向発願心。具三心者必生彼国。復有三種衆生。当得往生。何等為三。一者慈心不殺具諸戒行。二者読誦大乗方等経典。三者修行六念廻向発願生彼仏国。具此功徳。一日乃至七日。即得往生。（『大正大蔵経』巻十二、三四四頁下）

『起信論』は、如来蔵思想を根幹として自己の心が自性清浄であることを信ずることを説く論書であり、三心は三種発心を説くうちの信成就発心の三種心として説かれる。

復次信成就発心者。発何等心。略説有三種。云何為三。一者直心。正念真如法故。二者深心。楽集一切諸善行故。三者大悲心。欲抜一切衆生苦故。（『大正大蔵経』巻三二、五八〇頁下）

武覚超氏は、『維摩経』に説かれる浄土門が「自力所修の浄土業因」（『菴羅記』巻九『大日本仏教全書』巻五、二一二頁下）であると説かれることから、これを聖道門であるとみて、長西説と凝然説の相違を以下のように図示している。（武覚超「凝然の菩提心と『起信論』―良源からの影響―」、注⑩参照）

（長西）　　（凝然）

維摩経三心 ＼　／ 聖道門 ―― 維摩経三心

観行三心 ／　＼ 浄土門 ―― 観経三心

起信論三心 ／　＼ 起信論三心

一般的な浄土門・聖道門の理解からいえば、凝然の理解は武氏のいう右図のようになるであろうが、凝然自身が『維摩経』に説かれる直心・深心・大乗心を「浄土業」と言っており（『菴羅記』巻九『大日本仏教全書』巻五、二一八頁下）、また「今疏（＝『維摩経義疏』）所立浄土門」（『菴羅記』巻九『大日本仏教全書』巻五、二一三頁上）と述べて『維摩経義疏』に浄土門が説かれていると考えていることなどから、やはり凝然は『維摩経』を長西と同じく浄土門であるととらえていたと考えられる。

⑫元照は、『四分律羯磨疏済縁記』において、『観経』に説かれる三心と三聚浄戒を受持することで弥陀浄土への往生が可能になると説いている。

初心怯懦容退菩提故、須期生弥陀浄土。況復円宗三聚即是上品三心。律儀断悪即至誠心。摂善修智即是深心。摂生利物即廻向発願心。既具三心必登上品、得無生忍、不待多生成仏菩提了、無退屈。（『新纂大日本続蔵経』巻四一、二六〇頁下）

『凝然大徳事績梗概』（注①参照）によれば、東大寺図書館蔵の『梵網戒本疏日珠鈔』の紙背に、巻数不明の『業疏済記詳義鈔』が残されていることがわかる。このことから凝然が『済縁記』を閲覧し研究していたことは間違いないであろう。何故凝然が元照の説を直接採用しなかったかについては、今後の課題としたい。